シリーズ「徳川家康と清水港～清水港を水軍の基地に～」①(全４回)

家康が駿府に在住した期間は大別して３期ある。幼少期から青年期、今川氏の人質として初めて駿府の地を踏んでから桶狭間の戦いまでの１０年７カ月。豊臣秀吉の天下統一期、浜松城主から駿府城主となった３年８カ月。江戸幕府を開設した後、将軍職を２代秀忠に譲り駿府に退隠してから死去するまでの８年１１カ月である。３期合せて２３年１ヶ月を数え、家康７４年の生涯のうち駿府に在住した期間が約３分の１を占める。家康にとって駿府はまさに第二のふるさとであった。

具体的資料には乏しいが、家康が駿府に在住した期間に清水の地に幾度となく訪ねたことであろう。初めて清水湊(清見潟)を目にしたのは、おそらく清見寺に太原雪斎長老を訪れた幼い時であろう。今川義元の軍師であり、臨済寺と清見寺の住持を兼務していた晩年の雪斎に学問を習ったと伝えられている。両寺には「家康公手習いの間」が今も残っている。

清水港が湊(津)としての機能を備えるようになったのは、平安時代末から鎌倉時代初期の頃と推察されている。このころ、巴川右岸には入江の地を中心に入江庄が形成されていた。駿河の国司を歴任した後にこの地に土着した藤原南家の末裔藤原時信がこの荘園を開発し、その子右馬允維清が入江氏を名乗り、土着の武士として活動した。

入江氏は当時の巴川の河口に近い入江白髭神社の西側、海船川(大沢川旧流)と巴川との合流点に津を設けていた。この津(江尻湊・入江津)が清水湊の前身である。

室町時代、この地を支配した今川氏は駿府の外港として軍船の基地を設置し、また、商業港として活用した。今川輝元・義元の時期には湊の付近に江尻の三日市、入江の七日市が開市されていた。

戦国時代末期、甲斐の武田氏が駿河に進攻し、江尻湊の対岸に江尻城を築いて駿河支配の拠点とした。そして東の北条水軍に対抗するために巴川河口付近に袋城を築いて水軍の基地としている。

天正１０年(１５８２)、信長家康連合軍の武田攻略の際、袋城は家康に攻め落とされている。この袋城跡は、秀吉の小田原北条攻めや大坂夏の陣の折に、兵站基地として利用されている。

徳川家康は全国制覇の後、慶長１２年(１６０７)大御所として駿府城を築き、二元政治を展開した。江戸の２代将軍秀忠には幕府体制の土台固めと関東以北の統治をまかせ、家康自らは駿府で軍事指揮権と外交権を掌握していた。駿府に近い清水湊は駿府の外港として軍事的経済的に重要な湊に位置づけした。

家康は駿府城に移ると早速、村松の三ツ山(現　羽衣橋南側、静清浄化センター付近)に御船蔵を建て関船を設置して徳川水軍の基地を築いた。武田水軍の将であった向井将監正綱を御船手奉行、小浜民部小輔元隆を御船手頭に任じ、水夫５０人を配置した。関船には家康御召船として長永丸(長さ１０間５尺４寸、４６挺立)、頼宜御召船大広丸、他に御供船に小竜丸、吉岡丸、鷲丸など５艘を配備した。

当時、徳川家康は全国制覇をしたものの、西日本には豊臣氏は存続し、その恩顧をうけた大名勢力も気がかりの存在であった。その意味で、清水港は駿府攻権にとって重要な軍事拠点であったのである。

≪東照大権現像(徳川記念財団蔵)≫

※　このシリーズは「徳川家康と清水港」について杉山氏の寄稿によるもので、今回は連載１回目です。

杉山　満（すぎやま　みつる）昭和１１年、静岡市清水区生まれ。日本考古学協会員。　清水郷土史研究会顧問。

シリーズ「徳川家康と清水港」②(全４回)

２．御浜御殿・貝島御殿の建設

慶長１２年(１６０７)三ツ山に関船蔵を設置すると同時に、三ツ山から北西約１．５ｋｍの地点に御浜御殿(清水御殿)を建設した。家康の子息で駿府城主頼宜(よりのぶ)の命により、家康の別邸として建てた建物である。御殿は下清水八幡神社の東、現在の聖母保育園やカトリック清水教会の建つ敷地付近に位置する。保育園や教会の石垣の一部は当時のもので、御殿の面影を残している。八幡神社の境内には、嘉永７年(１８５４)地元の有志が建立した「烈祖殿(れつそでん)址の碑」(市指定文化財)が移されている。この碑文には往時の御殿を偲ぶ文言が刻まれている。御殿は「殿上間、松の間、柳の間」など見事な部屋があり、すばらしい景観だったという。建物が完成した慶長１５年(１６１０)、家康はここを訪れ、船で清見潟を遊覧したと伝えられている。

貝島御殿は三保半島から内海に突き出た貝島埼に同年頼宜により建てられた。御浜御殿とは一対をなしている。富士の眺望を楽しむための富士見櫓(やぐら)も設けられていた。

両御殿は家康の保養のために建てられたといわれているが、実は清水湊を監視する役割を担っていたともいわれている。

なお、家康が他界すると御殿は取り壊され、建物の一部は家康の側室お万の方(頼宜、頼房の生母)が再建した沓谷の蓮永寺本堂として移築されたが、安永３年(１７７４)に焼失した。

３．三つ石、八つ石

慶長１２年(１６０７)の駿府城の築城は天下普請であったので、石垣の石材は西日本の大名から献上されたものもあった。海上を清水湊まで運搬し、川舟に積みかえて巴川の水路で上土(あげつち)まで運ばれた。その際川に落とした石もあり「落城」につながるとして、そのまま利用されなかった。その後、再利用され、今も記念碑的に残っている石も現存している。

三つ石は柳橋付近で落とされた３個の巨石で、干潮の時は川面に顔を出していたという。

明治２７年(１８９４)巴川製紙工場が川岸に建設された際、この石が引き上げられ、会社正門の門柱として利用され今も生かされている。

八つ石は JR 巴川鉄橋付近で落水した石で、現在、入江慈雲寺本堂裏手の庭石となっている。

４．駿府城本丸から清水湊に通ずる水路

平成４年(１９９２)駿府公園再整備に伴う発掘調査で、本丸堀から二の丸堀を結ぶ水路が検出された。堀のように両側が石垣積みされ、底にも石敷された堅固な構造であった。

この水路は三の丸堀に通じ、水落から横内川に流れ、上土で巴川に合流していた。

本丸から小舟に乗り、清水湊まで移動することが可能であった。事実、家康はこの水路で清水湊まで下ったことがあり、この時巴川沿岸の改修を命じたといわれている。

≪御浜御殿の石垣(聖母保育園内)≫

≪烈祖殿址の碑(下清水八幡神社境内)≫

※　このシリーズは「徳川家康と清水港」について杉山氏の寄稿によるもので、今回は連載２回目です。

杉山　満（すぎやま　みつる）昭和１１年、静岡市清水区生まれ。日本考古学協会員。　清水郷土史研究会顧問。

シリーズ「徳川家康と清水港」③(全４回)

５．清水湊の築港

武田氏滅亡後、駿河は家康の領地となり、武田水軍の基地袋城も家康の支配下になっていた。

天正１８年(１５９０)豊臣秀吉の小田原城攻略の時は袋城跡は兵站(へいたん)基地として利用された。奉行長束正家の指揮下に、多くの軍船や兵が結集され、兵粮米２０万石が備えられた。

慶長１９年(１６１４)、家康は駿府の町づくりの一環としてここに新たな湊町をつくり、駿府の外港とした。駿府町奉行彦坂光正に命じて袋城跡を埋めたて、町屋を建てさせた。こうして袋町、魚町、仲町、美濃町が生まれた。

江川の巴川合流点付近から、上町、本町、中町、美濃輪の沿岸部に石垣を築き、船の接岸を可能にした。

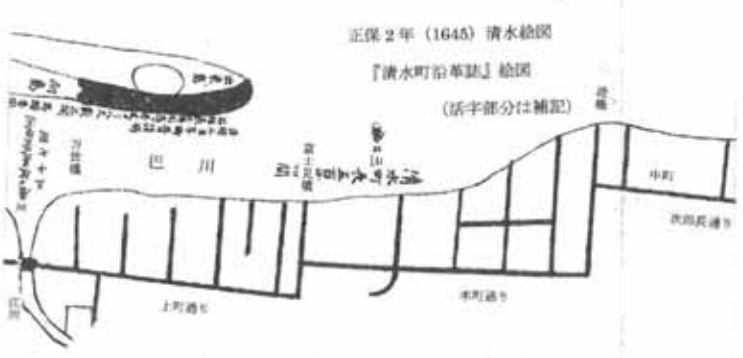
廻船問屋は本町、上町を中心に道筋に面して軒を連ね、倉庫群は船着場に沿って建てられた。清水湊は浜清水と呼ばれたこの地に誕生したのである。三ツ山の幕府水軍の基地と並んで、浜清水湊は家康の駿府政権にとって経済を支える重要な商業港となったのである。

明治時代以後、清水港が貿易港としてめざましい発展を遂げる礎となったのである。

６．廻船問屋の成立(１)

元和元年(１６１５)、前年の大坂冬の陣に次いで夏の陣が起った。この時、新装なった清水湊に兵器、食糧が集められ、清水湊の海運業者らはその海上運搬の役務を命ぜられた。この戦いで家康は念頭の豊臣氏の打倒を果たした。家康は戦後物資の運搬に奉仕した浜清水の業者の功労を賞賛し、その恩賞として４２戸の業者らに廻船問屋(諸問屋)の特権を与えた。廻船問屋の特権とは、安倍川、富士川間の沿岸部では回船業を浜清水の４２戸の問屋(株仲間の商人)に限定し、営業の独占権を認めたことである。株仲間以外の商人が沿岸で物資の商取引をした場合は罰せられた。廻船問屋には廻船を所有し、諸国の物資の回漕・買付を主とする受払問屋と、諸国から物資を買い受け地元仲買人に売却する売買問屋があり、両者を兼ねる問屋もいた。

受払問屋は最少１艘、大問屋は２艘程度の大廻船(俗に千石船という)を所有し、清水湊には江戸初期では６０艘前後が係留されていた。他に５００石積以下の小廻船や五十集(いさば)、はしけなど総数２００艘ほどの船があった。また、南海路の定期船菱垣(ひがき)廻船や知多船も入港し、湊は大賑わいであったという。



≪正保２年(1645)　清水絵図≫

※　シリーズ「徳川家康と清水港」は杉山氏の寄稿によるもので、今回は連載３回目です。

杉山　満（すぎやま　みつる）昭和１１年、静岡市清水区生まれ。日本考古学協会員。　清水郷土史研究会顧問。

シリーズ「徳川家康と清水港」④(全4回)

７．交通網の整備

　徳川家康は大御所として駿府にもどって以来、駿府を中心とした町づくりに意を配っている。清水湊も駿府の外港として、城下の経済的発展と一体感をもって重視していた。

　その政策の一つとして交通網の整備が挙げられる。慶長６年(１６０１)新たな東海道として５３次の宿駅を定めたが、江尻宿が新たに宿駅に加えられた。江尻宿付近の道筋をみると、街道は直角に近いほどの急カーブをして大きく迂回している。清水湊に隣接している江尻宿をあえて宿駅にしようとする幕府の意図がうかがえる。

　室町時代末期(戦国時代の末)、江尻の地域は、江尻湊、江尻・入江の三斎市、江尻城の城下町など商工業が急速に発達していた。

　江戸時代になると、浜清水に廻船問屋が生まれ海上交易が盛んになり、清水湊、江尻宿は駿府の町づくりの一環として繁栄した。

　駿府は人口１０万人といわれる大消費地である。清水湊で陸揚げされた物資は水陸交通で駿府に運ばれた。

　清水湊の開港と同時に、浜清水から東海道追分までの道路ができた。「志ミづ道」である。湊からの物資を牛や馬の背で運んだので地元では牛道、馬道と呼んだ。

　追分の東海道との分岐点には「是より志ミづ道」と刻された道標が建ち、その一隅に街道名物追分羊かんを商う老舗があった。

　久能道は駿河七観音の一寺久能寺を参詣する古道であったが、江戸初期、久能山東照宮が創建されると東照宮の参詣道となった。

　この久能道は、清水湊からは清水湊道(清水み奈登道)で村松の本能寺角で接続しており、岡清水を通り、入江南小路で東海道に合流していた。

　水上交通では、清水湊に陸揚げされた荷物は川舟に積みかえて巴川上流の上土(あげつち)まで運び、上土からは北街道で府中まで陸送されることもあった。

　慶長１２年(１６０７)、徳川家康の命によって京都の豪商角倉了以が富士川を開削し、岩淵河岸から甲斐の鰍沢・青柳・黒沢の三河岸を結ぶ舟運を開いた。

　この舟運により、甲州廻米を江戸に送り(下り米)、甲州へは赤穂の塩をはじめ茶、魚などが運ばれたが、これらの物資の大半は蒲原湊から一旦清水湊に運ばれ、廻米は千石舟で江戸に送られたという。清水湊は駿府の外港としてだけでなく、甲信地方の外港的役割を果たしていた。徳川家康の清水湊への遠大な思い入れを知ることができるのである。

≪追分・東海道(手前)と志ミづ道(左奥)の分岐点に建つ道標≫

※　シリーズ「徳川家康と清水港」は杉山氏の寄稿によるもので、今回は連載最終回です。

杉山　満（すぎやま　みつる）昭和１１年、静岡市清水区生まれ。日本考古学協会員。清水郷土史研究会顧問。